

研究室から

のんびりとした越後線で高校に通学し始めたころ、僕はまだおチビちゃんだった。満員の通学列車の中では、制服の井戸の中へ落ちてしまったようなものである。ところが筍(たけのこ)よろしく、高校の三年間で身長が三〇センチ近くも伸びてしまったものだから、視界は一変してしまった。女子高生よりも低かった僕は、黒い波間に、あちらに一人、こちらに一人と同族が頭を出しているのを見ていた。

視点が変わると世界は変わる。通学列車で変わったのも風景だけではなかった。ふと気づくと、大人の背中がずいぶん小さくなっていった。

高校を卒業すると地元

の国立大学へ進学した。他の大学など知るべくもないから、これが大学だと信じていた。その後、東京の私立大学の大学院に進み、国立大学と、ユニークな教育理念を前面に出す私立大学とがどんなに違うかを思い知らされた。

視線の高さ

大学院修了後はそのまま助手になった。今度は先生の立場になったわけである。大学は、そのたびごとに違う姿を見せた。新発田市に新しい大学ができることになり、三年前、敬和学園大学の開学とともに最年少の教師として赴任した。開学前後の一部始終を、巻き込まれながら見守ることになった。

一方、新潟を離れていたその間に、県内の高等教育をめぐる情勢は大きく変化していたのであった。

西村秀雄(敬和学園大学講師・科学史)

研究室から

開学したばかりの大学は、案外静かなものである。新入生、つまり第一期生しかいないのだ。先輩を持たない彼らは、すべてを自分たちの手で創(つく)り出さなければならぬ。

そろわないのは学生だけではない。教授陣も学年の進行にあわせて赴任してくるから、開学当初には定員の半数以下しかいない。故に最年少の僕は学内を走り回ることになる。大学の基礎を築くといえれば聞かえないが。

学生は学園祭を心待ちにしていたが、よく聞いてみると準備はできておらず、そもそも彼らはその種の経験をまったく持っていなかった。仕方がないから実行委員会の企画にアイデアを出し、パノフの編集の仕方を教え、学園祭本番の前後に

は遅くまでつきあうことになる。

こういう場面では実力が問われる。何人もの学生が才能を発揮してくれた。千人近くの学生がキャンパスを闊歩(かっぽ)する今、あのころを正確に思い出すのは難しい。

学園祭は、学生が工夫しながらこなしている。いくつか気づかないわけではないが、余計な口は挟まない。自分で経験しなければ、本物にはならないからだ。

がんばれ第1期生

つい最近、彼らとまとまって会う機会があった。皆ずいぶんたくましく、そして大人になっていた。同じこの三年間に、果たして彼らと同じくらい成長しているだろうかと自問せざるを得なかった。

この春、県内の新設三大学は第一期生を迎え、敬和学園大学ではその第一期生が本格的に就職活動に入る。頑張れ第一期生。

西村秀雄(敬和学園大学講師・科学史)

研究室から

新学期。九十分の授業

が半ばに來ると学生の注意力が急に低下することがある。高校までの授業はおおむね四十五分。小学校から刻み込んだリズムである。大学の新生入生には授業の長さだけでも苦痛なのだ。しかも僕が担当する「自然科学史」は、文科と理科の学際的な科目だから、授業をわかりやすくするために工夫が必要となる。全体の構成から毎回のポイント、学生からのフィードバック。さまざまな仕掛けも登場する。図を中心とした手作りの印刷教材を毎回用意して、重要な部分をビデオで映し出したり、関係する音楽を聴かせたり。理解しにくい天文現象を説明するために、パソコンと特殊な装置で、教室にプラネタリ

ウムだって再現してしまふ。毎回簡単なアンケートをとっているが、学生は授業に積極的に参加するようになるし、何よりも授業を楽しんでいるようだ。

わかる授業

「わかる授業」は、学生の視点で、すなわち消費者の視点で構成されるということがポイントだろう。考えてみれば、国立大学の学生の頃（ころ）の授業は、生産者の立場だけが重視された一方通行のものが多かったように思う。授業を工夫すれば学生はよく理解してくれる。しかも妙な先入見を持たないのは、最近の学生の特徴ではないだろうか。しかし、本当に「わかる」とはどういうことなのか。万華鏡のようなブラウン管の、その向こうの「見えないもの」をつかみ取る能力をどうやって伸ばすのか。

わかる授業の模索は続く。

西村秀雄（敬和学園大学講師・科学史）

研究室から

うのものもある。

実は、中学生を納得させることはできない。より正確には、中世までのヨーロッパ人が経験していた範囲では、地動説は証明不可能だったのだ。無知蒙昧(もうまい)の代名詞たる天動説は、きわめて精緻(せいじ)な理論体系だったのである。

授業は続く。この議論

は近代人が自己中心的であること、異なる視点を持つことが困難であることを示唆している。近・現代の呪縛(じゅばく)から解き放たれたとたん、古代や中世が生き生きと甦(よみがえ)ってくる。

それでは、問われているのはいったい誰(だれ)なのか。僕の授業は、ここから面白くなる。

授業で僕が実際に使用するのは、太陽や月や星座が内側に描かれた特別な傘である。学生に教えてもらって手に入れた。ありがたいものだな、と思う。

西村 秀雄(敬和学園大学講師・科学史)

僕の授業「自然科学史」に登場するのはハイテク機器だけではない。カーテンレールとゴルフボールさえあれば有名な「ガリレオの斜面の実験」が再現できる。

傘だって「天動説」の立派な教材だ。想像力を働かせながら傘を広げよう。内側には太陽や月が描いてある。椅子(いす)に腰掛けて傘を少しだけ斜めに傾け、ゆっくりと回転させる。ちょうど太陽や月が東から昇り、西へ沈むように。

傘の使用方法

ここで学生に問いかける。「聡明(そうめい)な中学生がいる。中学生は回転しているのは太陽や月の方だと考えた。動くのが椅子であること、すなわち地動説を理解させるにはどうするか」。答は実にさまざま。理科の教科書をもう一度読ませる。人工衛星から見せる。力づくで、などとい

研究室から

何年かのブランクの後、再び新潟に住むようになった。この間に新潟市内の私立高校をめぐる状況は大きく変化していた。何校かが新設されていたし、何よりも私

立高校全体の評価が高くなっていった。ずいぶん遠い地域から私立を、それも第一志望で目指しているという。私立高校間で、良い意味での競争が行われた結果である。アピールポイントとは大学への進学率、女子が安心して通学できるミッション系、中高一貫教育など。偏差値という物差しは、少し古びてきた。

同じような変化が県内の四年制私立大学にも起こるだろう、と僕は予測する。

四年制大学を志望する県内の高校生には、つい最近までごく狭い選択肢

しか与えられていなかった。地元の国立か関東の私立かである。普通の高校生に大学の門は少し遠すぎた。

進学だけが問題なのはなかった。地元国立大学の学生の多くはこれまで、官公庁や特定の企業だけを見つめていた。大学は、社会を支える平均的な企業にも冷淡だったのである。

変わる県内大学事情

状況はかなり改善されてきた。いくつもの四年制私立大学が設立されて、進学チャンスは確実に広がりがつつある。キーワードは環日本海、デザイン、地域に密着した経営情報、情報文化、そして実践的な語学力。新潟県の人材の層の厚さにも寄与していくだろう。

より高い教育を求める勉強好きの高校生が、興味や関心にあった大学へ進む。しかも自宅から通学する。そんな光景が、めずらしいことではなくなりつつある。

西村秀雄（敬和学園大学講師・科学史）